

ふるさと散歩道 第二二三回

間部詮勝の時代(一)

— 冷遇されていた鯖江藩間部家 —

今回から、鯖江藩第七代藩主で、幕府老中としても幕末の国政に深く関わった間部詮勝公の足跡を、当時の時代背景とともに辿ります。

内憂外患の日本

十九世紀、米(農業)を基本としていた幕藩体制に貨幣経済が浸透し、豪農や商人が台頭する一方で支配層であった武士が困窮する事態となりました。さらに、長引く飢饉により百姓一揆や打ちこわしが続発しますが、幕府や諸藩は有効な対策がとれませんでした。

また、日本近海には外国船の目撃情報も相次ぎ、日本の港に侵入する事件も多発していました。これは、いわゆる産業



フェートン号事件
文化5年(1808)、鎖国下の長崎港にイギリス軍艦が侵入した事件。

革命に成功した欧米諸国が自国製品の輸出市場と低賃金労働力を求めて、東アジアの植民地化に乗り出してきたことを示していたのです。

十歳で藩主へ

このような幕末動乱への火種がくすぶり始めた文化元年(一八〇四)、詮勝は鯖江藩第五代藩主間部詮漈の三男として江戸で生まれました。兄である六代藩主詮允は、藩士教育のための惜陰堂や進徳館の建設、藩士家禄(給料)の改定など藩政改革を推進していましたが、二十五歳で急死、弟の詮勝がわずか十歳で藩主となったのです。

幕府からの報復措置

さて、間部家はその初代間部詮房が六・七代將軍の側用人として権勢を振るいましたが、八代將軍徳川吉宗のときに



間部詮勝肖像画(部分)(個人蔵)
明治維新後の肖像とされる

失脚、その後は高崎(群馬県)から村上(新潟県)、鯖江へと領地替えを繰り返しました。これは幕府による大名統制策でしたが、実はそれ以上の理由があったようです。つまり、譜代大名で五万石という鯖江藩の家格からは当然、幕府の役職を得るはずでしたが、詮房以降は幕府から無視され、城を持つことも許されませんでした。これは異例中の異例であり、詮房時代の反動から間部家(鯖江藩)は幕府から懲罰的な措置を受けていたのです。

【用語解説】
側用人↓將軍の命令を老中に伝える役職
奏者番↓大名の贈物や書状を將軍に取り次ぐ役職

これ以降、詮勝と鯖江藩は激動の時代に身を投じることになります。(文化課 前田清彦)



玉雪画幅 「玉雪」は間部詮勝正室康子の雅号

詮勝、政治の表舞台へ

ところが、文政九年(二八二六)、詮勝二十二歳のときに奏者番として抜擢されると、幕政に関わる要職を歴任し、まさにトントン拍子の出世を遂げていきます。これはもちろん詮勝自身が有能だったためですが、詮勝の正室である康子が石見国(鳥取県)浜田藩主松平康任の娘であったことに関係があります。

つまり、文政九年は松平康任が老中に

就任した年(以後九年間在職)でもあるので、幕閣内部での自分の勢力を拡大するために娘婿で有能な詮勝を抜擢したのでしよう。